

研究の概要

足利市立小俣小学校

1 研究主題

学ぶ楽しさや喜びを感じ、確かな学力を身につける子どもの育成
～ 一人一人の子どもの心を感じとることができる教師 ～

2 基本的な考え方

本校は一昨年度の平成21年度から3ヵ年、足利市教育委員会より人権教育研究学校の指定を受け、「足利市の学校における人権教育推進の方策」に則り、教師の「人権に対する認識の深まり」を前提にした「教育の本質」の実践と研究に取り組んでいる。

本校では、学校教育目標の具現を図るため、学校課題でもある「学ぶ楽しさや喜びを感じ、確かな学力を身につける子どもの育成」を研究主題に掲げた。

このような子どもを育成するためには「教育の本質にかかわる実践」を積み上げることが大切である。つまり、一人一人の子どもへの着眼を通して、子どもの多様性への認識を深めていくことにより、子どもとの信頼関係を深めることが、私たち教師にとって大切であると考えた。

そこで、「一人一人の子どもの心を感じとることができる教師」を副主題に掲げ、このような教師を目指していくための実践を通し、研究主題「学ぶ楽しさや喜びを感じ、確かな学力を身につける子どもの育成」を目指し、その研究を進めていくこととした。

今、目の前にいる子どもたちは、様々な不安や悩み、思いや願いを抱きながら学校生活を送っている。学習が理解できずに悩んでいる子もいるだろう。友達関係のことで悩んでいる子もいるだろう。そして、自分ではどうすることもできないことで悩んでいる子もいるだろう。

私たち教師は、今、目の前にいる「この子」のことを、どれだけ分かっているのだろうか。どれだけ分かろうと努力をしているのだろうか。

子どもの不安や悩みを受け止めていく過程は、その子どもの心に教師自らが近づこうとする過程に他ならない。「この子」は何につまずいているのか、なぜつまずいているのか、何を悩んでいるのか、どのような思いを抱いているのかなどを把握することで、「この子」を見る教師の視線が変わってくる。そして、分からないことを分かろうと努力し、見えないものを見ていこうと努力することで、子どもたちを見る眼と感じる心をさらに養っていきたい。そのためにも、教師一人一人がこれまでの教育実践を見つめ直し、自らの不完全さを認識していくことが必要である。

このような子どものことを深く理解しようとする真摯な姿勢、子どものことを深く理解しようとする教師の姿こそが、子どもとの信頼関係の深まりにつながっていくのではないだろうか。

「自分のことを本気で心配してくれる先生がいる」「一緒に悩んでくれる先生がいる」「自分のことを分かってくれる先生がいる」という思いが、たとえ自分ではどうすることもできないような困難なことに出会ったときでも、「頑張ってみよう」という思いにつながっていくものと考え。そして、このような教師と子どもたち一人一人との信頼関係の深まりが、やがて「自分はかけがえのない存在である」という、実感をともなった認識を生み出していくであろう。

以上の考えから、本校の研究は「把握」と「よりよい関係づくり」をキーワードに、教師と子ども一人一人とのかかわりを、具体的な実践を通して一つ一つ積み上げ、推進していくことにした。

3 推進構想図



4 研究副主題に迫るための考え方

本校では、研究副主題「一人一人の子どもの心を感じとることができる教師」に迫るために、「子どもの把握」と「子ども(保護者)とのよりよい関係づくり」をキーワードとし、その実践化を目指すこととした。具体的には、本校では人権教育を「子ども達一人一人を大切に育てる教育」と捉え、私たち教師は「一人一人の子どものをよく見ていこう」と確認した。

その指針となるものは、自校化を図った人権教育上のチェックポイントである。一日の流れの中で、子どもを把握する場面を考えて作成。いつでも見ることができる場所に置き、日々の実践をふりかえることができるようにした。そして、具現化するための方策として、

- ①学級経営上の取り組みとして「思いやり、支え合う、仲間づくり」
- ②学習指導上の取り組みとして「わかる授業づくり」
- ③保護者への正しい理解と協力を求めるために「相談しやすい関係づくり」

これら3つの具体的な場面の実践を通して、副主題に迫ろうと考えた。

さらに、私たち教師自身が自らの不完全さを認識するとともに、自らの差別意識を払拭するための研修、そして、同和問題に対する認識を深めるため・人権教育の認識を深めるための研修を行うこととした。

5 研究の経過

本校の研究は、これまでに取り組んでいた「学び方支援教育」「イースターヴィレッジ児童とのかかわり」などをもとに、「足利市の学校における人権教育推進の方策」に則って進めることとした。

<以前から継続して取り組んできたこと>

- 家庭訪問での相互啓発
- 人権作文の活用
- 人権教育にかかわる授業参観の実施と啓発
- 被差別体験者との交流学习会
- 児童養護施設から学ぶ
- 学び方支援教育を通して、一人一人を知る など

<1年次 平成21年度>

- ①研究体制の構築、研究主題及び副主題の設定
- ②自校のチェックポイントの作成・活用
- ③授業研究会（9回実施）：上・下学年に分かれての分科会、座席表の活用
（国語、算数、社会、理科、総合、道徳、特別支援教育）
- ④坂西中学校との研究交流
- ⑤児童の把握を記録
- ⑥教職員の情報交換
- ⑦児童の把握とかかわりのまとめ

<2年次 平成22年度>

- ①研究体制の見直し（4部会体制）、研究主題・副主題の確認
- ②チェックポイントの見直し・日々のふりかえり
- ③授業研究会（5回実施）：低・中・高学年に分かれての分科会
（国語、社会、算数、理科、音楽、体育、英会話、道徳、特別支援教育）
付箋紙を使って、話題が焦点化 話し合いのポイント「この子を通して何が見えてきたか」

- ④坂西中学校との研究交流
- ⑤児童の把握を記録：日々の記録の日常化，より多くの子どもとかかわれるようになった
- ⑥教職員の情報交換：意外な一面の発見
- ⑦QUテストの活用：子どもの新たな一面の発見
- ⑧木曜朝のショート研修：人権教育の推進の方策の読み合わせ，子どもの情報交換
- ⑨東京方面フィールドワーク自主参加
- ⑩児童の把握とかかわりのまとめ

< 3年次 平成23年度 >

- ①研究体制の見直し，研究のまとめ
- ②チェックポイントの活用により，より多くの児童とかかわるように
- ③授業研究会（4回実施）：子どもの名前が飛び交う分科会
- ④坂西中学校との研究交流
- ⑤児童の把握を記録：よさを認め，伸びに気づく，つまずきに気づく，手だてを考えるように
- ⑥教職員の情報交換：子どもの名前が飛び交う職員室
- ⑦QUテストの活用：年2回実施
- ⑧児童の把握とかかわりのまとめ

6 思いやり，支え合う，仲間づくり

小俣小のチェックポイントを確認しながら，いつも自分を振り返り子どもとかかわりを意識するようにした。

(1) 一人一人の子どもの悩みや思いを把握

- ①日常の子どもの実態を座席表へ記録し蓄積することで，子どもの事実を把握するようにした。
- ②特別支援担当教員を交えチーム会議を開き，子どもの把握・支援について話し合った。
- ③休み時間，放課後などの時間を使い，ブロックの先生，出授業の先生，学びの指導員，心の相談員などとの情報交換をすることで，多面的に子どもを把握するようにした。
- ④異学年交流活動で，子どもとかかわりながら子どもの姿を把握するようにした。

(2) よりよい関係づくりのために

- ①「よいことをした人・してもらった人」の発表など，よさを認め合う場を設定した。
- ②子どもの言動，表情などを把握し教師から子どもへ声かけをするようにした。
- ③一人一人を大切にする教室環境を心がけた。



○実践事例1（2年児童とのかかわりから）

入学当初のA児は、友だちへのちょっかいや乱暴な言葉が多かった。自分のやりたいことだけやりやりたくないことはやらない子どもだと思っていた。授業でも突然大きな声を出したり、授業に関係のないことを言ったり、離席したりすることが多く、授業が中断してしまうこともあった。そのため、私はA児を注意してしまうことが多かった。家庭訪問で母親と話してみると、家庭でも兄弟の中で怒られることが多いようであった。「つい人を怒らせることを言うので怒ってしまう。」「野球部でもルールを守らなくて、監督から注意されることが多い。」と母親が話していた。

A児の様子を見守り、A児と話をした時「ぼくは、みんなの役に立ちたいんだ。」と言ったことがあった。思い返してみると、彼の行動は、勝手に黒板を消すのではなく、役に立ちたいから黒板を消す。授業でも答えたい気持ちをもちながら答えられなくて、大きな声を出したり関係のないことを言ったりすることが分かった。また、言葉が足りなくて友だちに誤解されていることも多かった。何かを持ってきてやったのに「とられた」と言われたので友だちの悪口を言った、友だちになりたくて肩を組んだつもりが、友だちからは「首を絞められた。」と言われけんかになったなど友だちとのかかわり方が分からないようだった。その都度、「Aさんはあなたと仲良くしたいと思って肩を組んだんだよ。でもそれを首を絞められたと勘違いしたんだね。」などと友だちにA児の気持ちを伝えるようにした。A児は安心したような表情を見せた。母親とも学校でのかかわりを伝えたと、家庭でも怒る前にA児に話を聞くようにしていると話してくれた。2学期後半には、生活のルールを守り友だちとも上手に関わるようになってきた。学習面でも、教科書やノートを準備し学習課題に取りかかっている。分からないところは、「分からない、教えて」と聞きに来て最後までしっかり取り組んでいた。分かったという時の表情はとてもうれしそうに見えた。

3学期が始まり6年生を送る会の歌の練習をしていると、歌詞を覚えるまでは歌わず、友だちからはふざけて歌っていると見られてしまっていた。しかし歌詞を覚えてからは、心を込めてきちんと歌っていた。まだまだ友だちに誤解されてしまう言動も見られるが、その回数は減り表情が穏やかになってきたように感じられた。

2年生になり引き続きA児の担任となった。朝早く登校し友達と校庭でサッカーをするようになった。今までは始業時刻5分前くらいに登校していたが、登校時間が早くなり友だちと遊べるようになったことをA児も喜んでいだろうと思っていた。しかし、サッカー友だちとのトラブルが多くなった。その都度、A児や他の子どもたちの話を聞きながら一つ一つ解決するようにした。A児は自分の考えや気持ちを聞いてもらえてほっとしたようで暴言はなかった。ある日、休み時間が終わりA児が「サッカー負けたのは・・・」と友だちと言い争いをしながら教室に戻ってきた。二人の話を聞き、サッカーに勝つためにどうしたら良いかを話し合いをすると、A児は「Bさんはゴールしか見ないからパスができない・・・」B児は「そうだよ。ぼくは、ゴールしか見てない。こんど・・・」などサッカーに勝つための作戦を話し合い仲直りをする事ができた。A児は、B児を責めずに次はどうするか作戦を話し合っていたことやA児がチーム全体の動きを見て動いていることに感心した。

最近では、授業が始まる前に教科書とノートを準備し、日にちや目当てを書いていることも増えてきた。離席することもなく話をきちんと聞くなど学習のルールを守って学習に取り組めるようになり、連絡帳や電話でそのことを家庭に伝えると母親も安心したようだった。また、6月のQUテストでは少しずつではあるが自己肯定感が高くなってきたと感じていることが分かった。A児が不安そうな表情をするときは声をかけるなどして、A児の笑顔がたくさん見られるようかかわっていきたい。

○実践事例2（3年児童とのかかわりから）

今年度からこの学級を担任することになった。そこで4月から気になったのがA児だった。A児は、学級代表になりたいと立候補するなど意欲的に取り組む姿勢をよく見せた。帰りの会で配布物を配る際にも配布の手伝いを積極的に行った。

しかし4月からA児は忘れ物が多く、「教科書を持ってくるのを忘れました。」「ノートを忘れてしまいました。」と毎日のように伝えに来た。「連絡帳も忘れました。」と言いに來ることもあった。そのため、「まずは、連絡帳は毎日持ってくるようにしましょう。」と約束した。その後、家庭訪問でA児は4人兄弟の長男で、母親も下の子の面倒で忙しくA児だけを見てあげることができず、A児は自分の持ち物をあちこちに広げていることが分かった。そのため、「まずは自分の家の中でA児の荷物を置く場所を決めよう。」と伝えた。すると、教科書や連絡帳など、毎日持ってくるべき持ち物は持ってくるようになった。ただ、授業で使う道具や提出する書類などその時々に必要な持ち物は忘れる場合が多かったため、「持ってくるべき物を連絡帳に赤で書く」など忘れ物を減らす工夫をした。その結果、教科書やノート、連絡帳の忘れ物を大きく減らすことができた。「先生、今日は持ってきたよ。」と伝えに来るので、「えらい。次も頼むよ。」と伝えると嬉しそうな顔をして児童の輪の中に戻っていった。

様々な場面で意欲的なA児だが、授業になるとその意欲がすっかり無くなってしまふことが多かった。算数の「かけ算」や「たし算とひき算」の単元では、授業の始めの頃は板書をノートにしっかり書いていたが、授業後半は板書をほとんどノートに書けず、書けていても読めないような力のない字で意欲は非常に低かった。

そこで授業前半に「できた喜び」「わかる楽しさ」を感じさせようと思い、授業で意図的にA児を指名する回数を増やした。本人の中で苦手としていた算数で意図的に指名したら少し変化が見られた。算数の「わり算」で、授業の導入として前時の復習の計算問題を出す際にA児を指名した。A児は答えに不安を持っていたため、先生に正しいか確認しに来た。「合ってるよ。ぱっちり。自信をもって黒板に書いてきて。」と伝えると、嬉しそうな顔をして、堂々と答えを書くことができた。クラスの友達から「合ってます。」と言われるほっとした表情で嬉しそうだった。それを機にだんだんと自分から手を挙げ、自信をもって計算問題を解くようになった。さらに、わり算の長い文章題も丁寧に書くようになり、学習への意欲が見られるようになった。「今日は長い文章も書けてるね。すごい。」と伝えると、照れくさそうにしてノートの続きを書いていた。

4月始めの友達関係は、すぐに言い合いになることが多かった。A児が話しかけに来るときには「○○さんが～と言ってきました。」「○○さんがけてきた、ぶってきた。」とトラブルの報告がほとんどだった。まずは事のいきさつを聞いてA児の思いを受け止めるようにした。すっきりしたのか表情も和らいできたように見えた。話を聞いた後、「やり返さずに先生に言って。」「何か言われたときには『やめて。』と相手に言い、絶対に言い返さないようにして。」と伝えた。さらにA児の良い行動を増やそうと思い、「クラスの学級代表として、みんなに悪いことは悪いと注意できるみんなのお手本になってほしい。」とも伝えた。

すると、学級代表として、授業が始まるときにみんなに「静かに。」と注意したり、朝会で移動するときも前へ前へ出て「前へならえ。」と並ばせたり、学級代表として責任感をもって役割を果たすことができるようになってきた。友だちもその指示を聞きテキパキと行動することが多くなり、言葉には出ないが認められてきたのではないかと感じた。今後、A児と他の子どもとのかかわりを観察しながらA児の不安や悩み、人間関係を把握したい。

○実践事例3（6年児童とのかかわりから）

A児を5年生から担任しているが、真面目な性格で、しっかりできないといけないという思いが強い児童という印象であった。その分、不安を感じやすく、苦手な学習に直面すると、自分を否定してしまう言動が見られ、気になっていた。

5年生半ば頃のA児は、休み時間、通級している特別支援学級の児童と遊ぶことが多くなっていた。学級の仲のよい友達と一緒に野球部に入ることになり、その喜びを嬉しそうに話していたが、結局、家の都合で入部が叶わず、「やっぱり、入れなくなった。」と寂しそうに呟いていた。心を許せる友達との共通の時間がもてなくなり、残念そうだった。このころのA児は、学級の中での居場所が感じられていなかったのかもしれない。「友達が欲しい。」と家で打ち明けていたこともあった。日頃の学級の友達との交流は、心のよりどころになっていなかったように思う。A児の願いを知ろうと話をすると、通級クラスの友達や後輩とのかかわりを大切にしたい一方、学級の友達とも遊んで仲良くしたいという思いから、悩んでいる様子がわかった。通級クラスの友達からは、自分を頼りにしている・必要としているという、自己の存在価値が感じられるようであった。体育で50m走のタイムを計測したとき、クラスで上位の記録だったので、6年時のリレーの選手や、陸上部への入部などを期待した言葉かけをしたが、あまり乗り気ではない様子が見られた。自分のよさに自信がもてていないのではないかと感じた。

6年生になり、スポーツの得意な友達が、休み時間に、進んでサッカーなどの遊びに誘うようになり、クラスの友達と接する時間が多くなっていった。1学期、体育の50m走でクラス2位の記録を出した。5年生の時のように、誉めながら、陸上部の話をしたところ、「入ります。」と力強く答えた。5年生の時との反応の差に驚くとともに、うれしくなった。走り終えたあと、友達がA児のそばに集まり、記録を知り、「すげえ。おれ、負けちゃった。」などと声をあげていることだった。「Aさん、速いね。」と声をかけている女子もいた。周りの友達に称賛されて、本当に満足した嬉しそうな表情を浮かべていた。

6月の図工の単元で、糸のこぎりを使った工作の学習があった。A児は、糸のこぎりですっ直ぐに切れないことを、以前から心配していた。そこで、切る順番がきたら担任を呼ぶことを約束し、一緒に切ったり、途中で補助の手を離して、「一人で出来るじゃない。」と、声をかけたりしてきた。ポスト型の作品が完成した時、周囲の友達が、「すごい。かっこいい。」と言いながら集まってきた。A児は学習当初の、板を切り分ける際の面倒そうな顔と打って変わり、誇らしげな顔をしていた。達成感を味わっているようにも見えた。「先生、今日持ち帰ってもいいですか。」と聞いてきた。数日間、学級に全員の作品を飾っておきたかったのだが、A児のすぐに家で飾ったり使ったりしたいと訴える目に、「いいよ。おうちの人にも頑張ったことを伝えてね。」と答え、持ち帰らせた。

友達に、認められたと自分で感じた時に、A児は、自信をもつことができたようである。自分から、遊びに誘う様子も見られるようになってきた。また、友達のトラブルの仲裁をして、うまく解決してあげていることもあった。友達との積極的なかかわりが見られるようになり、表情も明るくなった。A児は、夏休みに入る前に、毎日世話をしてきた教室の花のことを案じて、担任に水やりを託してきた。登校日に、その約束を守り、水やりを欠かさなかったことを伝えると、元気だったその花を見て、安心した表情を浮かべた。

これから、卒業までの残された日々、A児の安心した表情が見られるように、休み時間のたあいもない会話も大切に、人間関係を把握しながら、A児の思いや不安や悩みを把握できるようかかわっていきたい。

7 分かる授業づくり

(1) 児童が学ぶ楽しさや喜びを感じ、確かな学力を身につけるためには、まず、分かる授業であることが大前提であると考えます。そのためには、一人一人の子どもの心を感じ取り、必要な支援を行うことができるよう、次の内容を中心に分かる授業づくりを目指した。

①一人一人を把握するための工夫

・学習指導におけるチェックポイントを活用し、授業中の児童の様子や気持ち、学習状況等を把握する。

○少人数・TT指導の工夫

・算数科の学習を中心に少人数・TT指導の工夫を行い分かる授業の実践に努める。

○机間指導

・毎時間個別学習の時間を位置づけ、一人一人に深くかかわるように努める。
・机間指導で声かけや具体的な支援を行いながら、一人一人の表情・つぶやきや学習状況やつまづき等を把握する。

○座席表の活用

・日常の授業や生活の中で、把握したことをメモし、一人一人のよさの発見に努める。研究授業では、事前に把握した学習状況の様子やその子のよさ等を記入し、授業者のもつ情報を共有し合い、分科会での話し合いに生かすようにする。

②人権問題に直接かかわる内容の指導（道徳、6年社会、他）

(2) 授業の実践例（別紙参照）

① 実践例1	平成23年6月28日	第2学年	国語
	教材名 「うれしい言葉」		
② 実践例2	平成23年6月28日	第3学年	道徳
	主題名	ともだちのよさ	資料名 「たまちゃん、大好き」
③ 実践例3	平成22年11月15日	特別支援学級	生活単元学習
	単元名 「よい子の学習発表会を成功させよう」		

これらの実践を通して児童の実態把握・子どもと教師のかかわりにより、その子は、どうなったか。授業が成立したか。楽しさや喜びを感じたか。その結果確かな学力が身についたか。そして、教師はこの子を通して何ができてきたか。

子どもと教師の具体的なかかわりを通して、より深く子どもを見ていく実践を進めてきた。

実践例 1

平成 23 年 6 月 28 日 第 2 学年 国語


教材名「うれしいことば」 (総時数 1 時間)

① A 児とのかかわり

A 児は授業中、積極的に挙手をして自分の考えを発表することもあれば、足を組んで教科書やノートを出さないこともあり、学習意欲にむらがある。また、書くことに苦手意識をもっていて、作文を書く際、「何て書くの」と聞きに来ることがあった。そんなときは、A 児の話をよく聞いて一緒に考えるようにしている。

A 児から話しかけてくることは少ないため、意図的に話しかけるように心がけた。授業では、机間指導で声をかけ、よいところはみんなの前でほめるようにした。A 児はしだいに、休みの日にうれしかったこと、いやだったことを話すようになった。授業でも分からないことを聞くようになってきて、分かったときは進んで発表するようになってきた。

② 本時の指導

本時	学習活動	児童の実態把握 子どもと教師のかかわり	その子は怎么样了か 授業が成立したか 楽しさや喜びを感じたか
導 入	1. 学習課題について確認する	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>うれしいポーズ</u>」や「<u>かなしいポーズ</u>」をとるのを、<u>恥ずかしがっていた。</u> ・<u>A 児が安心して活動を取り組めるよう、個別に声かけをした。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 回目から、みんなと一緒に活動に参加することができた。笑顔が見られ、意欲の高まりが見られた。
	2. 文章を読んで感想を出し合う		
展 開	3. うれしかった言葉を発表する	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>文章にまとめる際、上手く文章に表すことができずに、不安そうにしていた。</u> 	
	4. 気持ちを文章にまとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>意図的に机間指導をし、話しかけた。</u> 	
	5. 友達の文章を読み、伝え合う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「<u>2つの言葉が書けたね。</u>」と褒める。 ・ <u>隣の席の友達と書いたものを交換して読み合うように指示した。</u> 	
終 末	6. 学習のまとめをする		

③ 事後

本時で書いた用紙を教室に掲示すると、自分の書いた用紙をうれしそうに見ていた。

④ この子を通して何が見えてきたか

机間指導の際、その子の行動の背景を考えて声かけをすることで、一人一人と向き合い、気持ちや思いを大切にできるようになった。学習状況を把握しながら授業を進めることの必要性を再認識した。

また、本人にとって分かりやすい目標を設定したり、個人の頑張りを認め、励ます言葉かけをしたりすることが大切だということが分かった。

実践例 2

平成 23 年 6 月 28 日 第 3 学年 道徳

主題名 友だちのよさ 資料名 たまちゃん、大好き

① B 児とのかかわり

友だちとのかかわりが上手にできない。気に入らないことがあると教室から出ていってしまったり、友だちに対して暴力行為に出してしまうこともある。トラブルがあったときは気持ちが落ち着いてきた頃に、B 児の気持ちを教師が受容的な態度でくみとることにより、次第に心を開き自分の悪かったところを振り返ることができるようになってきている。

授業中は、集中力に欠け、ノートに落書きをしたり、はさみやのりを机の上に出したりして、いじっていることが多い。整理整頓も苦手で、机の周りや教室のあちこちに物が落ちているが、それを気に留めることはなかった。はさみやのりも教師が一時預かりし、必要なときに渡すようにしたところ、少しずつ、学習に集中できるようになってきている。朝の会の前と中休みの後、掃除の後の 3 回を決めて行っている。最近では、物を落としていることに自分で気がつくことはできないが、一緒に片付け始めると、それぞれの片付ける場所は理解して片付けようとしてくることができている。

B 児は自尊心も低く、「どうせ、俺はできない。」と、いつも言っている。そこで、B 児の頑張り認め、賞賛の言葉かけを意識して接してみた。すると、B 児の得意な絵をととても根気強く描くことができるようになった。作文にも、「絵に自信を持って描いていきたい。」と書かれてあり、B 児がいろいろな活動に対して、意欲を持ち始めていることが分かりうれしく思った。

② 本時の指導

本時	学習活動	児童の実態把握 子どもと教師のかかわり	その子はどうなったか 授業が成立したか 楽しさや喜び楽しさを感じたか	確かな学力が 身についたか
導入	1. 友だちという言葉の持つ意味から友だちについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> 事前アンケートの結果から、友だちに関する意識が低い。 「友」という漢字の意味をクイズ形式にして提示してみた。 	<ul style="list-style-type: none"> クイズ形式で提示したので興味を持って、友だちという言葉の持つ意味を考えていた。 	
	2. 「たまちゃん、大好き」を読んで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 集中して学習に取り組むことが苦手である。 まる子がたまちゃんの立場になっていなかったことに気づく前と後の心の変化をよりわかりやすくするために板書の工夫や場面を声に出して読んだりした。 自分の考えに自信が持てなくて発表できないことが多い。 最初はワークシートで考えさせ、その後役割演技から全体の意見交換へつないでいくようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> 場面を声に出して読んだり、場面絵を用いて視覚的に訴えたことで B 児も気持ちを集中させて授業に臨んでいた。 ワークシートに書くことによって、気持ちを落ち着かせることができた。また、担任に朱書きをもらおうと安心した表情を見せていた。全体の意見交換の場では、挙手することはなかったが皆の意見をよく聞くことができた。 	
	3. 今までの生活を振り返り、これからの生活について考える。	<ul style="list-style-type: none"> 思ったことを文や言葉で表現することが得意ではない。 普段の学校生活の中で、友だちと協力している写真を掲示し、今までの自分を見つめるための助けになるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> 写真を提示したことで自分の生活に振り返りやすかったようで、ワークシートに自分ですらすらと書いていた 書き終わった児童の内容を発表していったが、B 児は秘密と言って見せようとしなかったが、教師がワークシートに書いた内容を受容すると B 児はうれしそうな表情をみせ、皆の前で発表することができた。 	
	4. 教師の説話		<ul style="list-style-type: none"> 価値にあう内容の詩を紹介することで、友だちの良さをクラスみんなが感じるようになってきた。 	

③ 事後

最近では、トラブルも少なくなり、友だちとサッカーを楽しむことができるようになってきている。また、クラスの中の助けが必要な友だちに対して、食器かごと一緒に運ぶのを手伝っていたり、一斉下校の際に、自分から声をかけ助けてあげている姿が見られるようになり思いやりの心も育ちつつある。これからは、B 児が、安心して過ごせる教室作り、友だち作りを支援していきたいと思っている。

④ この子を通して何がみえてきたか

目の前にいる一人の児童を大切に、深く見つめていくことは、教師が子どもの心情に寄り添って支援していくことにつながるものであると考える。児童を把握し、その都度適切に支援することが児童の意欲を喚起したり、持続したりすることができた。目に見えるつまづきだけでなく目に見えないつまづきにも支援しようと教師が努めることで、一層児童に関わるようになり、児童は安心して授業に参加できるようになるのではないかと考える。「どこでつまづくだろう」「どこでつまづいているだろう」という視点で教材研究を進め、把握支援することで、学ぶ楽しさや確かな学力が身についていくものと思われる。

実践例3

平成22年11月15日 特別支援学級 生活単元学習

単元名「よい子の学習発表会を成功させよう」（総時数20時間、本時17時）

① C児とのかかわり

C児は場の雰囲気や友達との言葉のやりとりで気持ちが不安定になりやすい。前の時間の出来事などで気持ちが落ち込んでいるとき、その気持ちを引きずってしまい、活動に参加することができなくなってしまったり、台詞を言う声が極端に小さくなってしまったりしていた。そこで、本単元では、C児が意欲をもって活動できるように、リーダーとしての役割を与えるよう計画した。本時の直前、本校児童の前で今まで練習してきたことを発表する場があった。C児は緊張のせいもあって台詞を言う声がやや小さくなってしまっていたが、ダンスの動きにはやる気が感じられた。

また、C児は、迷っている友達に声をかけたり、下級生に優しく教えてあげたりすることができる一面ももちあわせている。C児は、本時までの活動の中で、友達のいいところをたくさん見つけ、発表することができていた。

② 本時の指導

本時	学習活動	児童の実態把握 子どもと教師のかかわり	その子はどうなったか 授業が成立したか 楽しさや喜びを感じたか	確かな学力が 身についたか
導入	1. あいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>たくさんの参観者がいて視線が定まらない様子である。</u> ・ <u>授業のはじめのあいさつを堂々とした態度で言うことができ、学習に対する意欲が保たれていることが伺えた。表情にも力強さが見られた。</u> ・ <u>本時の見通しがもてるように、ホワイトボードに学習の流れを提示した。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの発表のビデオを真剣に見ることができた。 ・ 見通しをもてたことで、授業に集中できた。 	
	2. 昼休みの発表を振り返り本時の学習内容を知る。			
展開	3. 感想を発表しあう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>C児が友達の良い点を見つけて発表した際に、その行為を大いにほめた。</u> ・ <u>ほめられた後の表情がとても生き生きとしており、更に意欲が高まったことが伺えた。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2回3回と発表しようとして積極的に挙手した。友達の良いところを見つけるだけでなく、自分たちの演技をよりよいものにするための提案もした。その後の演技の練習の際には、台詞を大きな声で言うなど、生き生きと活動する姿が見られた。 	
	4. みんなの意見をもとに場面ごとに練習をする。			
終末	5. 学習のまとめをし、次時の学習内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>発表が終わると、教師が近くに寄り、「よかったよ」と声をかけた。</u> ・ <u>本番に向けての見通しがもてたよう</u>で、<u>C児の笑顔から安心感の高まりが見て取れた。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ C児の発言が手本となり、他の児童もたくさん発表することができた。 ・ 終始集中して活動することができた。 ・ 時折笑顔ものぞかせた。自信をもつことができた。 ・ C児のこの時間の目標である「安定した態度で最後まで学習に臨むことができる」を十分に達成した。 	

③ 事後

本番の学習発表会では、大きな声で台詞を言ったり、のびのびと笑顔で踊ったり、自信にあふれた姿が見られた。「ほっとした」「やってよかった」などの感想が得られた。

④ この子を通して何が見えてきたか

教師が子どもの心情に寄り添い、適切なタイミングで共感の言葉を入れたり、行為をほめたりすることで、更なる意欲の向上につながることを再確認できた。

特別支援学級の児童に対しては、掲示物等を用いて活動に見通しをもたせるなどして分かりやすさと安心感を高めることが重要であり、それが自信につながっていくと思われる。そして、教師が分かりやすさや安心感を高める支援を意識することは、通常の学級での指導においても必要なのではと考える。

8 相談しやすい関係づくり（保護者啓発による相互啓発）

保護者と「相談しやすい関係」をつくることは、本校の人権教育の柱の一つである。保護者に人権教育への理解を深めてもらえるよう、機会を捉えて啓発を行っている。

（1）4月のPTA総会における啓発

小俣小学校では、人権教育を「子どもたち一人一人を大切に作る教育」と考えています。その中で私たち教師は、「一人一人の子ども」を「よく見ていこう」としています。
本校人権教育の3つの柱

- おもいやり、ささえあえる仲間づくり
- 「わかった」と実感できる授業づくり
- 保護者が気軽に相談できる関係づくり

上記のようなプリントを配布し、学校長より「小俣小の人権教育」の話をした。

（2）たよりにおける啓発

①学校新聞

本校では、学校新聞を年2回発行している。学年末の発行時に、人権教育主任により「小俣小の人権教育」としてその年度、重点的に行ってきた内容を伝え理解と協力を求めてきた。

平成21年度では、「学校での人権教育の目的は、自分(子ども)にかかわる不安や悩み(差別)を自分で乗り越える力を付けること」とし、3つの柱

- ・思いやり、ささえあえる関係づくり
- ・分かったと実感できる授業づくり
- ・保護者が気軽に相談できる関係づくり

を、教師の子ども理解、保護者理解を前提としてやっていくことを伝えた。

平成22年度は、副題に「子どもの心を感じ取る教師を目指して」と書き加え、私たち教師の思いを明確にした。そして、「確かな学力の定着」という学校教育の基本を達成し、よりよい学校生活を送るために、

- ・「分かるようになってうれしい、勉強って楽しい」と子どもが思う授業づくり
- ・子ども理解を基盤とした、子どもおよび保護者とのよりよい関係づくり
- ・不安や悩みを乗り越える力の基となる、自尊感情の向上のための子ども理解

を通して、一人一人を大切にしていけることが学校における人権教育だと考えていることを伝えた。

②学校だより

保護者に向けて発行している学校だより「おまた小」では、学校生活の中で子どもたちが生き生きと活動している様子を写真や文章で伝えている。始業式や終業式での児童代表の作文や児童集会を楽しむ児童の写真などの掲載がある。学校全体で、子どもたち一人一人のがんばっている姿の中で、教師が把握したことを保護者に伝えている。

③学年だより

毎月発行される学年だよりでは、「人権教育コーナー」が設定されている。ここでは、子どもたちの行動の中から「互いを大切にする気持ち」を取り上げて、学校で進めている人権教育に保護者の理解と共感を得たいと考えてきた。同時に、子どもの心を感じ取り、大切にしようとしている教師の姿勢を伝えることで、保護者との信頼関係を築いていこうとしてきた。

例 1学年だより 7月号

プールでの忘れ物を教室に持って行ったり、水をこぼしてしまった友達を手伝って一緒に拭いたり、友達をそっと助けてあげる姿を見かけます。自然に出た優しさなのだろうと感じます。

(3) 家庭訪問における啓発

5月に行った家庭訪問では、事前に全職員で保護者啓発のねらいや留意点について共通理解を図った。学校生活の中で把握した子どものプラス面を伝えるよう留意し、教師が子どもをよく見ていることを保護者に理解してもらい「一人一人を大切にする教育」が「人権教育」であることを伝えられればと、確認した。そして、保護者の願いや思い、不安や悩みを共感的に聞き受け止めることにより、保護者との信頼関係を深められればと確認した。また、気になる子どもがいた場合は随時、家庭訪問を行い、子どもの様子を伝えると共に、保護者と一緒に考える機会としている。

〈保護者の声より〉

- ・友だちとのトラブルが減ってきているので安心。
- ・特定の友達から、新しい友達ができつつあるのでほっとしている。
- ・友達が増え、楽しく遊んでいる。
- ・クラス替えがあり心配したが、仲よくやれているので安心した。
- ・友達同士の言葉づかいが気になる。
- ・いじめを心配しているが、まだないので安心してている。
- ・クラス替えでなかよしの友達と離れてしまいストレスを感じているようだったが、友人関係を広げつつある。
- ・男女仲よく過ごしている。
- ・教師の優しさが甘やかしにつながってしまうのではないかと心配。心の強さを求めたい。
- ・困難に立ち向かったときに、くじけない強い心を育ててほしい。



(4) 人権作文を活用した実践

7月に児童全員が「人権作文」を書いた。児童の作文に担任がコメントを書いたものを家庭に持ち帰り、保護者に読んでもらい、感想を書いてもらった。

このことにより、保護者は子どもの思いや願い、不安や悩みなどについて改めて知ることができると共に、子どもとの関わり方を振り返る機会にもなっているようだ。また、保護者に担任の思いを知ってもらい、或いは保護者の考えを担任が知る機会にもなった。

保護者も担任も、子どもを大切にしていこう、子どもを支えようという点で同じ視点に立つことができ、お互いの信頼関係が深まるのではないかと考えている。

〈保護者の声より〉

- ・作文を読んでみて、人がつらい時などに心配するということは、大事なことだということ、子どもが分かっているようで、安心しました。つらいときは、そのつらさを分かち合うのは、とてもいいことだと思います。いつもけんかをしているお兄ちゃんなのに、つらいと分かれば、タオルをぬらしてきてくれたり、とても積極的に動いてくれます。家族一同、助け合いができるということ、大事だと思います。
- ・一人っ子として長い間、大人に囲まれて過ごしてきました。その中でいつも優しく接してくれていた祖母が倒れてしまい、不安と心配でいっぱいだったと思います。12歳になってもまだまだ人に何かをしてもらうのが当たり前という意識でいるものだと思っていましたが、この作文を読んで何か役に立つことをしなければという人を思いやる気持ちが育っていたんだと安心しました。この作文のコピーを敬老の日に祖母に渡しました。
- ・高学年というやや難しい年頃となり、反抗的な口ごたえも増えてきたなど感じることも多くなりました。素直で優しい子に育ってほしいという親の願いとは裏腹だと思っていたのですが、今回の作文を読んで息子の心の奥には、日頃口には出せない思いやりが秘められていることを知り、大変うれしく思いました。自分の子どもとはいえ一人の人間として尊重し合う中で、家族仲良く暮らしながら、お互いに成長していければと考えさせられました。
- ・娘の作文を読んで、娘がこんなことを思っていたのかと、感心したりうれしくなったりと不思議な気持ちでした。長女は、いつも母に注意される側だったので、母も少し反省しています。年下の子に親切にできる娘はとても成長したなとうれしく思います。誰かが悪いことをしたら、きちんと注意することも必要。でも、思いやりの心を持った優しい言葉でなければ相手には伝わらない。それが大切なことだと思う。母も子どもたちにそういう風に接するべきだと教わった。誰だって注意されたらおもしろくない。それでも負けずに「悪いことをしたら注意する」という娘はすごいと思った。
- ・サーブが上手にできないA君がネットを越えられるように、ルールを変え、さらにA君のサーブがネットを越えたら、敵、味方、関係なく喜び合える子どもたちの優しさに感動しました。そして、A君だけでなく、サーブの苦手な子は前から打ってもよいとルールを変え、みんなで楽しめるようにしたこともすばらしいと思います。
- ・最初に作文を読んだ時、涙があふれて止まりませんでした。こんな風に母のことを思ってくれていたんだと。私は、母の介護に必死でしたが、母を引き取って一緒に暮らしたことが、子どもに悪影響になってしまうのではないかという不安にもかられていました。この作文を書くことがなければ、子どものこんな気持ちにも気づかなかったかもしれません。ありがとうございました。

9 教職員研修

現職教育のまとめに多く取り上げられる「人権教育の更なる推進」において、教職員一人一人が人権感覚を高めることを切に願っていることが明らかになってきた。そこで、本校では教師の基底を支えるため様々な研修の機会をもってきた。

(1) 同和問題に対する認識を深める研修（年1回）

教師の同和問題に対する認識を深める研修では、地域福祉会館を会場に部落解放同盟栃木県連合会足利市協議会の方々を招き、少人数小集団で話し合いをする交流会を年1回計画し、3分科会と全体会の形式で行っている。

まず、グループ分けすることで、教職員が「私の人権教育」について語る時間をもった。次に、被差別体験者からの話を聞き、差別の実態と教育への願いを直接受け止める機会とした。それにより、教職員一人一人がより深く自分の人権教育と向き合い、見つめ直すこととなった。

○差別の現状を認識し、その実態をとらえる。

○差別に負けず、力強く生きてきた被差別体験者の生き方に学ぶ。

○差別解消への思いや親としての願いに共感し、学校教育の役割を再認識する。

<教師の感想より>

・差別を受けたことによる影響は、長期にわたることもあり、人の一生に多大な影響があることが分かった。子どもの思いをとらえ、その子どもに応じて支援したり、声をかけたりしたいという思いを新たにしたい。

・一人の教員として、将来を担う子ども達に、同和問題をはじめとする人権問題の現状や歴史、考え方を正しく教えていく責務があると思う。まずは目の前にいる子どもたちに、身近なところの人権に触れさせていきたい。あいさつすること、友達と協力すること、男女で助け合うこと、最後までやり遂げること……。これらの小さなことの積み重ねが、やがて大きな問題に立ち向かう力になっていくのだと感じた。

・日々、自分の子どもも含め、色々な子どもたちとかかわり、その子の人間形成に少なからず影響を与えることのできる立場にいるわたし達教員は、差別を許さない、正しいことを正しいと言える、人の痛みのわかる人間に育ってくれるよう、学校の様々な活動の中で、種まきをし、耕していきたいと思う。

・「部落はなくならないが、差別はなくなる。」という言葉が胸に染みた。「部落」という響きが「故郷」のように、よいものに聞こえるようになればいいなあと思つた。

・人の言葉や行動が相手を傷つけてしまうことがあるのは、認識していたつもりだったが、現実には、心を痛め、苦しんでいる被差別体験者のお子さんの話は、日ごろの自分の言動をふり返り、反省するきっかけとなった。日ごろの自分の立ち居振る舞いなどが、児童に大きな影響を与えることは、常に頭において生活していなければいけないと改めて感じた。

・いじめなどの場面を目にしたら、毅然とそれに立ち向かい、善悪を教えるとともに、正しい理解や判断ができる子（大人）が育つようにかかわっていく必要性を強く感じた。

・学級の中には、辛い思いをだれにも言えずに困っている子どもが存在することを前提に、目に見えない部分を見ようとし、それに対して自分のできること、やるべきことを考えて行動できるようにしたい。

・今の保護者の世代やその親の世代（60～70代）は、同和問題を理解しつつあるように思われた。正しい知識を持つことの大切さを痛感した。

・教室の中には、悩みを抱えていても話せない子どももいるので、威圧的ではなく、何でも話をしたり、聞いたりできるような教師になっていきたい。

・「悩んでいることを、親も子も教師に言えなかった。悩んでいる子がいるから、話を聞いて欲し

い。」という被差別体験者からの言葉が心に残った。本校の研究のサブテーマ「一人一人の子ども
の心を感じ取ることができる教師」を目指して、もっと子どもの様子を見て話しかけ、寄り添っ
ていかなければと思った。

・これからも、人権教育を根底において、子どもとも保護者ともより一層信頼関係を結んでいけ
るように努力したい。

・話し合いを通じて、自分自身のことをふり返り、20代ころからどのように考えが変容したか、
そのきっかけはどんなことだったのかを考えることができた。毎年の交流会や研修会を重ねるご
とに、自分自身の偏見や差別があったのではないかとふり返れるようになった。特に交流会では、
ご自身の体験を語っていただいたり、励ましていただいたりして、人から生き方までも学ばせて
いただき、本当に感謝している。

・終始一貫して、『差別を許さず、差別をせず、差別に負けない子ども』を育てるには、教育し
かないんだよ。先生方、よろしく願いますね。」と、何十年言い続けられてきたことか。その
信頼に答え、子どもを導く教師の存在を知り、自身もそうありたいと思った。

・差別され、苦しんできた体験があるからこそ、他の差別に対しても、心の痛みを感じ取れるの
だということが実感された。今でも差別がなお残っている現状や直接教材で部落のことを学んだ
孫にどう対応していくかが今の悩みというお話を聞き、今後負の連鎖を生まないように、教育
で正しい知識と判断力を養い、同和問題を解決していけるようにすることが重要であると思った。
教育の力を信じて、子どもたちに人権感覚を育てていけるよう努めたい。

・「大人から聞く言葉で、子どもはそのままに感じる。」といったお話を聞き、子どもは、保護者
から聞く言葉、教師から聞く言葉、周囲の様々な大人からの言葉にストレートに影響を受けるの
だということが痛感された。だからこそ、教員として正しい知識を持つこと、自分の中で咀嚼し
た考えを持つことが必要だと感じた。「人権」という幅広い言葉について、多面的に考えを持てる
ように学んでいきたい。・被差別体験者が、過去に受けた差別の体験について昨日のこ
のようによどみなく次々に話す姿を見て、その思いの深さに胸を打たれた。同和問題に対して色々な見解
があるが、やはり、「寝た子は正しく起こす」ことが大切だと思う。交流会での話題から、地元
の問題として起こったことを知り、正しく知ることの重要性、必要性を痛感した。

今後も被差別体験者との交流を重ね、人権問題の解決を自らの課題とし、差別を見抜く感性を高
める研修とする。差別される側の立場や思いを受け止めることができる教師を目指している。

(2) 児童養護施設の児童の認識を深める研修(年1回)

本校の学区内には、児童養護施設があり、そこから二十数名の児童が通学している。毎年、現
職研修に児童養護施設との情報交換を位置づけ、児童の認識を深める話し合いを行っている。

①児童養護施設の職員の方から

- ・それぞれの児童が施設に来るまでの生い立ち
- ・それぞれの児童の施設での生活の様子
- ・児童養護施設職員の子どもへの思い
- ・施設での子どもたちの交友関係 など

②本校の職員から

- ・それぞれの児童の学校での様子
- ・学校での子どもたちの交友関係 など

学校生活に適応できず、特別支援学級に在籍する児童や、通常の学級においても支援を受ける
児童も多い。そこで毎年施設を訪問し、一人一人の子どもの背景を共通理解し、揺れ動く心の声
を受け止めようとしている。ほかにも、家庭訪問、教育相談、児童相談所も入ったケース会議、
日々の連絡等、施設との連携を密にしている。これは、両職員が共通理解を図り、一体となって
子どもに対応していく重要な機会となっている。

(3) 朝のショート研修会について

平成22年度より、毎週木曜日の8:20~8:30(通常は朝の打ち合わせ時間)を利用して、職員が自主的に人権感覚を磨き合うためのショート研修の時間として設定した。この時間に、ブロックごとに児童の情報交換を行い、一人一人の児童を多面的に多くの職員が見守り、支援し合うことで、よりよい関係作りを実現していけるよう心がけている。

また、教師の人権意識を高めるための輪読会を行った。一つは、「足利市の学校における人権教育推進の方策」(平成19年3月版)の読み合わせを行った。また、「同和对策審議会答申」(昭和40年版)を読み、部落差別解消に尽力した人々の活動を学んだ。この機会を通し、同和問題の解消こそが国民の課題であり、責務でもあるということを知り、人権教育が今なお推進されていくことの重要性や意義について学んだ。

(4) 実地に学ぶフィールドワークへの参加

朝のショート研修会からの動きで、その実情と現状を感じ取るためにも、休みを利用して実際の地域に研修に行くことを希望する声が高まり、実施に踏み切った。人権が著しく侵害されていた現場に立ち、空気に触れ真実を知ること、参加者一人一人の人権の意識の高揚を図ることを目的としてフィールドワークを行った。また、部落解放同盟主催のフィールドワークに参加した。

校内研修

- ・期日 平成22年8月26日(木)
- ・場所 小塚原回向院(南千住)の見学
多摩全生園と国立ハンセン病資料館の見学

部落解放同盟主催研修

- ・期日 平成23年1月10日(月)
- ・場所 きねがわ小学校及び周辺地域

<教師の感想より>

・東京の「木下川」に行き、地元の方々との交流と地域を歩いて知るフィールドワークに参加した。「きねがわ小学校」、「ピッグスキンの皮革工場」「地域会館」等を訪問し、歴史や現状について見聞するうちに、半日の間にも、自分の考えが変化していくのが感じられた。それは、地域や人との直接的な交流によるものに他ならない。自分の物の見方や考え方、認識が深まるのは、知ること、感じることから始まるという思いを新たにした。「この地域一帯に流れるにおいては、わたし達にとっては、日々の生活の中の大切なにおい、父親が一日働いて家に戻ってきたときの甘美な懐のにおい、わたし達にとっては、かけがえのないにおいなのです。」という言葉が熱く胸に刺さった。交流することによって、相手の思いが自分の思いとなる。

そこに根付いて生活をなし、社会の中で、人々の生活を支える重要な仕事を担っている方々に対して、心なく浴びせかけられた差別的な言葉や視線、態度、社会的偏見の不条理さが思われた。民主化・国際化が叫ばれて久しい日本において、このような差別の現状を知るにつけ、人間の心の中においては、未だ立ち後れた根本的問題が残っていることが思われた。しかし、「木下川」の人々は、差別に負けず、明るく前向きに、差別解消に向かってたくましく生きている。自分も、自分の身近にある問題に目を向け、子どもたちとの関わりの中に生かしていきたい。

10 研究の成果と課題

【成 果】

(1) よりよい関係づくりのため、子どもの把握に努めるようになった ～本校教師の調査から～

①把握するために

- ・よいところをメモ，記録をするようになった ⇒ 多くの子どもにかかわるようになった
- ・何気ない会話や表情，つぶやきから，不安や悩み，喜びを感じられるよう心がけた
- ・一歩踏み込んでみるよう心がけた（笑顔の中にも実は悩みが・・・）
- ・机間指導をするようになった
- ・個別学習の時間を設定するようになった

②把握したこと

ア．学習面での把握

- ・子どもの心の状態，授業前に学習の準備などの様子を把握
- ・一人一人の子どもの思いや気持ちの把握
- ・学習上のつまずきや不安がどこからくるものかを把握

イ．生活面での把握

- ・多くの教職員との情報交換から多面的に把握
- ・家庭や生活背景などから多面的に把握
- ・日々のふれあいの中での何気ない会話やつぶやきから，一人一人の子どもの不安や悩みを把握

③成果

- ・子どものプラス面，一人一人のよさが見え，発見できるようになった
- ・気が付かなかったことが見えてきた
- ・子どもの心を感じとる力がついてきたように感じる

(2) 保護者とのよりよい関係づくりをめざした ～さまざまな保護者啓発の取り組みによって～

- ・保護者の話を共感的に聞くことができるようになった
- ・保護者とともに考えていこうとするようになった
- ・保護者との関係が深まり，その思いを知って子どもたちと接することができるようになった

【課 題】

(1) さらに子どもの把握に努める

(2) さらにあたたかい学級づくりを目指す（認め合い，励まし合える学級づくり）

(3) 保護者の思いをさらに把握する

(4) 保護者に学校での取り組みをさらに知ってもらう機会をつくる

(5) 本研究の継続と，その活用方法についての研究